



「このころもち」

その人の、その時

津守 真・房江夫妻に聞く（その1）

聞き手 江波諒子

●出会いのころ

江波（以下E） 津守先生は、今までにもいろいろなところで倉橋惣三について語つてきたださつていますが、それらを通してまた、新たに倉橋に出会えることがあります。学べることがあるのでないかと思います。また、今回お話をうかがう私のいまの心境は、子どもがお母さんに、素敵なお話をもつと聞かせて、もう一度聞かせて、とおねだりするようなことかなと思います。先生はこのインタビューの後に津守先生が生まれたのが明治十五年、その四十四年

話をもちかけられてどのように思われましたか。

津守真（以下M） 倉橋先生のことを、こうして改めて皆さんにお話しできるのは、本当に幸いなことだと、この間からずつとそう思っていました。私は青年期から日記をつけていて、倉橋先生に初めて会に行つた昭和二十四年五月九日やその前後のことも記しています。そのころの日記をこうして手元に置いてお話ししようと思いません。

E 倉橋が生まれたのが明治十五年、その四十四年後に津守先生がお生まれになっています。津守先生



は、大学一年生の時に岡部弥太郎^{注2}から倉橋先生の名前を聞き、それから、女高師（現お茶の水女子大学、以下お茶大）出身の愛育会の保育者の方から『幼稚園雑草^{注3}』を見せてもらい、そして昭和二十五年からお茶大で教え始められた。そして、それと前後して平井信義先生^{注4}に連れられて、倉橋先生に会われたのですね。

M そうです。そのあたりのことを、たびたび日記に書いています。毎週のように中野のご自宅を訪ねてはお話をうかがいました。倉橋先生をそうして訪ねて、僕はなんというか「ああ」と感激したんですね。書くことはもつとたくさんあつたことをいまもよく覚えているけれど、その時の様子や交わした会話ではなく、ただ印象に残っていることだけを日記に書いてあるんです。

●長い年月を模索する

E 今日ぜひうかがいたかったのは、『倉橋惣三「保育法」講義録』中の「今なぜ倉橋か^{注5}」で、先生が書かれていることについてです。倉橋先生にお会いした後のことだと思いますが、「私はかつて倉橋惣三は保育の実践をしたことがないからその観点からは彼の論には不充分な点があるのではないかと思つていました。……私はそのことを自覚するのに、長い年月を模索することになった」という文章

じます。いまはそこからもう何十年も経っていますが、もうこの時にご自分の中には、そのような歩みをするという決意のようなものはおありだったのでしょうか。

M そう思います。この後、数知れないいろいろな理論や学説が出てきたのだけれど、結局最後まで僕の中で残っているのは倉橋先生との出会いのころに日記に記したことです。

を見て私は、「長い年月を模索する」というこの言葉に、立ち止まってしまいました。大学でいろいろ勉強し、これから自分の道を決めていかれる時に、大学でさまざまな知識を学ぶにとどまらないようなご自分の道を、とてもていねいに時間をかけながら見つけ出していかれたということだと思うのですが。

M 僕は、模索の時期が本当に長かったんですね。

三十年かかって、まだわからない。それから保育そのものがわからない。このごろになつて初めて、前より少しそうな気がしてきましたのは、この類のことなんですね。子どもとつきあう時の「こころもち」というのが、自分でも身についてきたような気がするんですね。それはほんとうに、一瞬のことでもあり、長い期間の幅をもつたものもあり。

E 何か道を探していく時、ぱっと見つかる人と、むしろわざと遠回りするというのか、長い道程をかけて探し出したいことあるのではないかと思うんですね。同じことでも、すぐにわかつた、という

り方もあると思うんです。でも、あえて津守先生が長い時間とエネルギーをかけられたということに、私は、ああ、それでいいのかと納得するんですね。わからない中で、わからうとして向かっていく。

M そして、わからない。わからないことが保育。● 「こころもち」と保育学の現代的課題

E 科学的とか客観的とかいう話にかかると思うのですが、後の世代の私たちもやはり、そこに長い時間をかけて悩んで道を進んでいくのだと思うのです。今の保育や保育研究の現実を見て、大学で学ぶということ、あるいは学問の知識をどのように考えていったらよいと思われますか。

M いまはそういうことが大きな転換をする時代に立ち至っているのではないかと思います。保育学というと、人びとはつまらない小さいことと思うかもしれないけれど、でも今、保育のことは時代の仕事でしょう。学問としてどうかは置いておいて。そういう

うことを考へると、保育を取り巻く学問というの

は、これまでには想像できなかつたような、そういう大きな学問の可能性をはらんでいるのではないかと考えています。勝手なひとりよがりの考えかもしれないけれど、そういう点でも、哲学とか何々学よ

りも、保育学は大道となつて歩き始める。長い目で

見れば、今まさに、そこに立ち至つてゐる。倉橋先生の目指していたことも、そうだつたのでしよう。

E 子どもを真ん中において、360度保育の学問がある。その中心を子どもといふところに置かなければ保育とか子ども学といふのは、あり得ないというこ

とでしようか。

M 今回のテーマの「こころもち」は、そこに位置

するのではないかと思ひますね。倉橋先生がおっしゃつた「こころもち」というのは、科学的におさ

えることができるものではないでしよう。「こころもち」は「こころもち」であつて、子どもの「こころもち」に触れることなくして、子どもの保育も保

育学もないのではないかなあと思ひます。

E 「こころもち」と表現されることは、きわめて現実そのままというか、「科学的」ではすくいきれいなもののがものすごくあつて、ともかく言葉でも説明しきれない。

M それに近いですね。“その人の、その時”。

E 「こころもち」というのは、その場面に子どもがいて、保育者がいて、子ども同士でもいいのですが、その場面のできごとの周辺に漂うものや、けれど、漂うものを感じることが、地盤になつてゐるのかなと思うのですが。

M 文字にしてしまふと、もうわからないですね。

●子どもたちの中にいて

—八十三歳、いまこの時のこころもち

津守房江（以下F）名保育者が必要なのではなくて、よい保育者が必要なんだなあと、この間ちらつと思つたんですね。

M そう、保育の名人が必要なのではなくてね。

F 名人ではなくて、その人がいると何だか知らなければよかつた、と思う。愛育養護学校（以下愛育）の若い保育者が、津守先生が来てくみるとみんなが明るくなる、というのか、安心感ができる、と、そんなことを言つてくださつた。それはつまり、いつでも来ていただいて構いませんよ、という意味なのですけれどね。

E だから、そこで津守先生が何かなさつたことが素晴らしいことだったとか、そういうことではないですよね。そこにいらつしやる、その周辺の空気のことですよね。そこからみんなが感じ取るような。

F 酒し出す空気かな。

E 津守先生が「そこにいた」ということは、そこにすべてがあるということで、ですから見ない人はわかりませんよね。そこに居合わせれば、言葉でできないほどのたくさんのがそこにあって、それをを感じ取つていくことでしょう。

F 津守は現場から帰つてくると、「僕は愛育に

M ほんとうに、『その人のその時』なんですね。

先ほど来の日記、昭和二十四年九月五日。「今はほんとうに充実した気持ちで子どものこころの世界に入つていけそうに思う。ほんとうの人生の暗闇を見ないで、ほんとうにこの世界に遊んだら、どんなによいことだろう。こころの世界に遊び、その世界を考えしていく。私はこころの世界の遍歴を始めよう。」これは私がちょうど九月十九日に倉橋先生の所に行つた前後に書いたものです。いま、愛育で自分の見ている子どもたちと接する時には、ちょうどこのような感じだと思います。

E すごくうれしいのは、先生がとてもていねいにていねいに道を歩かれていらつしやる。それがとても大きな私の支えになつています。生きるのが樂になりますね。前を歩いているのが、みんなわかつた、はつきりとこうなんだ、という人ばかりではつらいです。

特集いま、□倉橋と出会う

行つても何にも役に立たない」とよく言つたんです。現在でもそう言つうんです。だけど私は、役に立つてゐるんだろうと思うんですね。存在 자체がね。みんなびかぴかの元気な人ばかり、いくら走つても疲れない人ばかりではなく、こうやつてみんなにお話しながら、こてつと寝てしまふよう人がいるのが、自然なことだと思うんです。それが八十三歳の、いまの「こころもち」なのではないかしら。愛育の子どもたちにとつても、こういうおじいさんが学校にいるということが、とてもいいんじゃないかと思いますよね。いつもびかぴかな、よくできる人ばかりがしのぎを削つて保育の世界でもやつてゐるのではなくて、なんとはなしにみんな少し体がゆるんでいる、それもいいんじやないでしようか。ゆるめられる、ということがね。

E いろいろな時間が流れている人がそこにいる。

F そうそう、そういう意味で。

M 最近僕は、現場について気持ちがいいんで

す。おもしろくなつた。若いころもおもしろかつたですよ。おもしろかつたけれども、こういう自然のおもしろさとはちょっと違つたかもしれないね。その点でも僕は、進歩したと思うんです。いまになつて、年をとればそれだけ衰えるというわけではなくて、こういう部分は進歩するんじやないかと、そんな感想をもつていてます。

津守真・津守房江(保育研究者) 江波諒子(常磐大学)

記録・山下紗織(お茶大大学院生)
構成・菊地知子(お茶大幼保プロジェクト)

1 最近のものとして、「『対談「今、倉橋を語る』」の準備の中では、児童の教育第一〇六卷第九号 二〇〇七年、『特集 日本保育学会第六十回大会 対談 今、倉橋を語る』 保育の実践と研究 12・2 スペース新

2 母子愛育会の初代教養部長
3 倉橋惣三文庫5、6 フレーベル館 二〇〇八年
(初版一九二六年)

4 昭和二十四年当時お茶大児童学科教員、母子愛育会
研究員、愛育病院小児科医

5 菊池ふじの監修、土屋とく編 フレーベル館

一九九〇年 p.24